

患者参加の事故防止を考える

— 点滴静脈注射における誤認防止の実態調査より —

福井 勝子 古工 操 三木 仁美 上原美穂子

徳島赤十字病院 看護部

要 旨

これまで医療現場での安全確保は医療者側に拠るところが大きかった。最近では患者参加の重要性が言われている。そこで患者参加による事故防止対策を浸透させるための第一段階として点滴静脈注射において患者と看護師からみた事故防止に対する意識と安全確認の現状についてアンケート調査をした。その結果次のことがわかった。

1. 看護師の患者確認方法は多い順に①名前を呼ぶ②ベットネーム確認であり、最も確実といえるリストバンド確認は低値である。
 2. 患者から見た看護師の確認行動の評価は全体に高い。
 3. 患者参加による確認行動の評価は低値であるが、その必要性は患者・看護師とも強く感じている。
- 以上により今後の患者参加による確認行動を根付かせる手掛かりとなった。

キーワード：患者参加，安全確認，事故防止

はじめに

医療事故の中でも誤薬は転倒転落について多く、その占める割合は大きい。これまで点滴時の安全確保は静脈注射マニュアル（以下マニュアルとする）が整備されたり、標語を掲げて啓発したり、実施側に拠る処が大きかった。最近では患者参加による事故防止の重要性とその効果が言われている。多忙な業務環境で、より確実に実施するためには、患者と共に確認を行うことが重要であると考え、そこで患者参加による事故防止策を検討して全看護師に浸透させるための第一段階として、点滴静脈注射における患者の事故防止に対する意識と看護師の安全確認の現状を知る目的で研究に取り組んだ。

研究方法

対象：師長を除く一般病棟の看護師145名
点滴静脈注射を受け研究参加に同意を得られた患者100名（持続点滴及びCVCを挿入している患者は除く）

方法：質問紙によるアンケート調査

用語の定義

患者参加：患者に名前を名乗ってもらう行為及び点滴ラベル、リストバンド、注射箋を看護師と共に確認すること

結 果

アンケート回収率は看護師140名（96.6%）、患者88名（88%）であった（図1，図2）。

1. 看護師の患者確認方法としては「患者の名前を呼

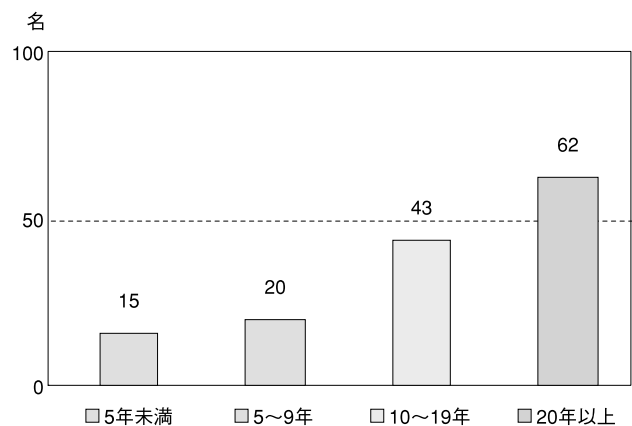


図1 看護師経験年数 (n=140)

ぶ」を確実にしているのが91名(65.0%)と最も多い。次に多いのが「ベッドネーム」で83名(59.3%), 3番目に多いのが「リストバンド」で62名(44.3%)であった(図3)。実際は, これらを複数組み合わせ確認しており, 最も多い確認方法は①「患者の名前を呼ぶ」「リストバンド」「ベッドネーム」の3項目を共に行っているのが31名(22.1%) ②「ベッドネームのみの確認」が25名(17.9%) ③「名前を呼び, ベッドネームでの確認」が23名(16.4%) ④「名前を呼びリストバンドの確認」が19名(13.6%) ⑤「リストバンドのみの確認」が7名(5%)であった(図4)。また「名前を呼ぶだけ」の確認は15名(10.7%), 「どの方法も確実にしていない」のは13名(9.3%)であった(図5)。

また患者参加による確認方法として「名前を名乗っ

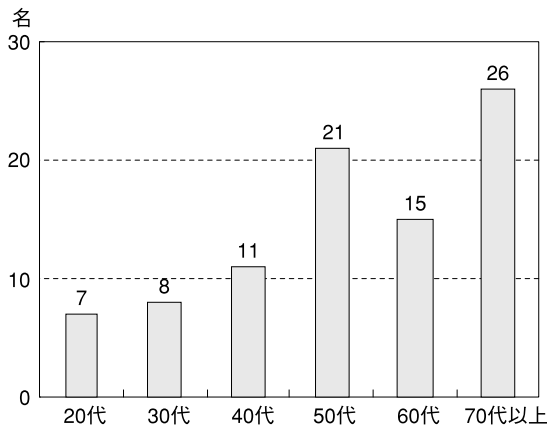


図2 年代別回答患者数 (n=88)

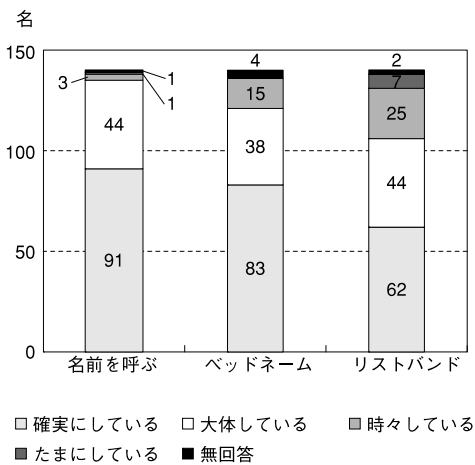


図3 看護師の確認方法

てもら」を確実にしているのは7名(5%)であり, 「点滴ラベルの名前を患者と共に確認している」は40名(28.6%)であった(図6)。「注射箋での名前確認」は135名(96.4%), 「点滴ラベルでの名前確認」は, 137名(97.9%)の看護師が確実に行っている。

2. 患者から見た「看護師のリストバンドでの確認」は, 確実にしている59名(67.1%)であった(図7)。「名前を名乗ってもらう」は, 確実にしている47名(53.4%)であった(図8)。

3. 患者から見た「看護師は点滴ラベルの名前の確認を患者と共にしているか」は, 「確実にしている」50名(56.8%)であった(図9)。看護師は「点滴

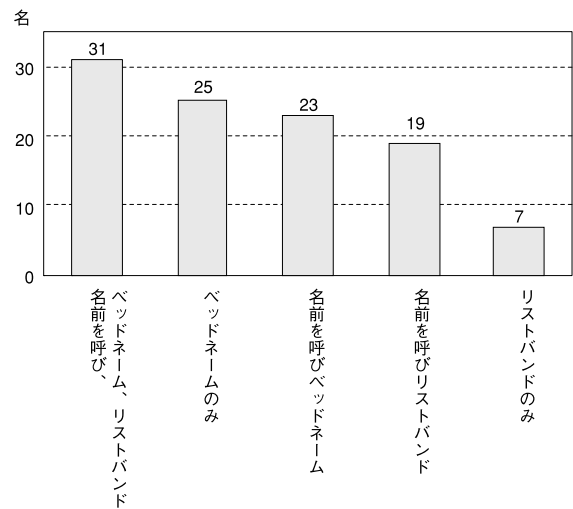


図4 実際におこなわれている確認方法

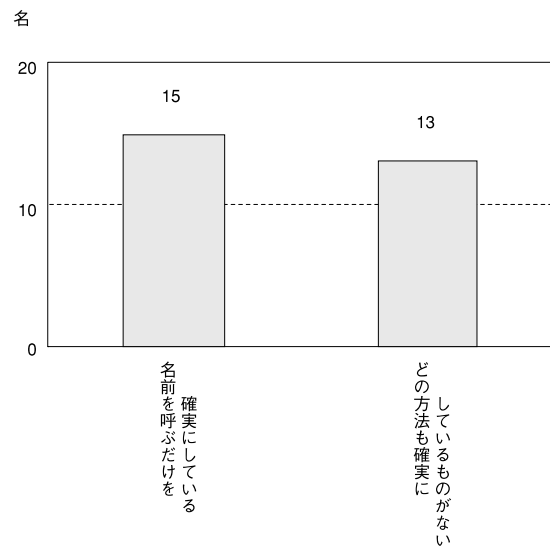


図5 実際に行なわれている確認方法

ラベルの日付の確認を患者と共にしているか」は確実にしている16名(11.4%)。患者は「点滴ラベルの日付確認を看護師と共にしているか」は確実にしている29名(33.0%)であった(図10)。

4. 看護師は「患者と共に点滴ラベルの名前を確認す

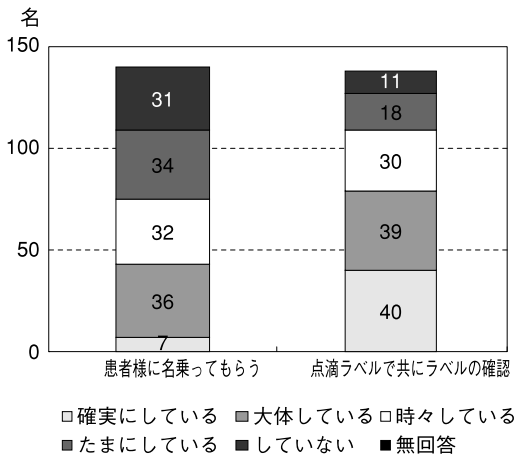


図6 患者参加による確認方法

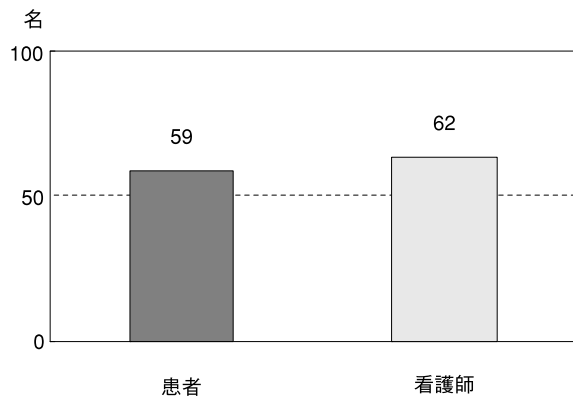


図7 看護師のリストバンドの確認

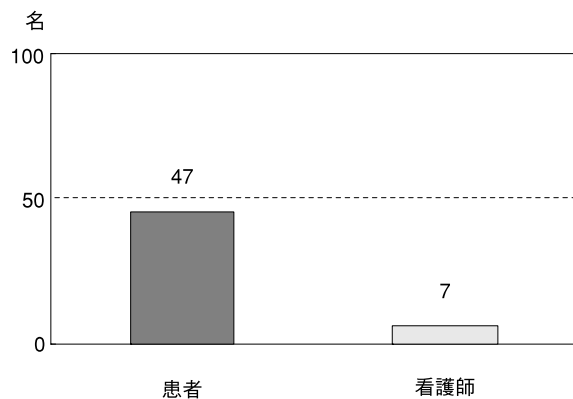


図8 名前を名乗ってもらう

る必要性」については、そう思う103名(73.6%)、ややそう思う24名(17.1%)、合わせて127名(90.7%)であった。患者側からも、そう思う71名(80.7%)、ややそう思う9名(10.2%)、合わせて80名(90.9%)であった(図11)。看護師は「患者と共に点滴ラベルの日付を確認する必要性」については、そう思う72名(51.4%)、ややそう思う45名(32.1%)であわせて117名(82.6%)であった。患者はそう思う58名(65.9%)、ややそう思う12名(13.6%)で合

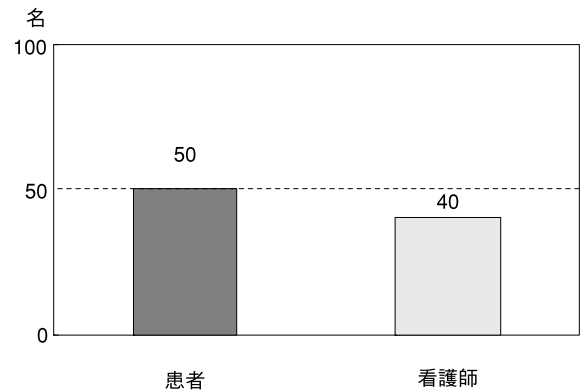


図9 患者と共に点滴ラベルの名前の確認をしたか

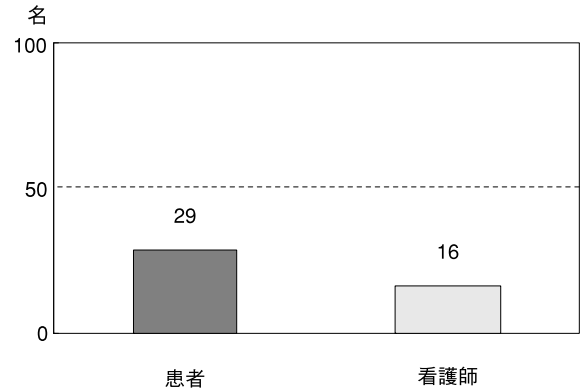


図10 患者と共に点滴ラベルの日付の確認をしたか

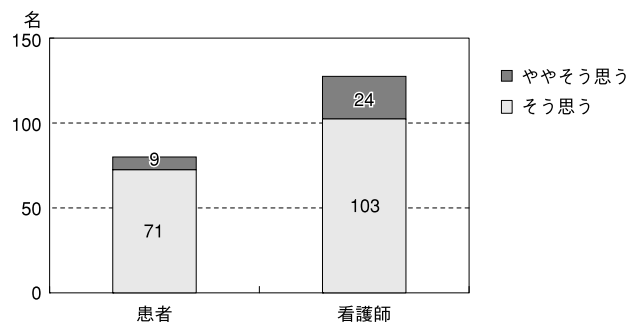


図11 患者と共に点滴ラベルの名前の確認する必要性

わせて70名 (79.5%) であった (図12)。

5. 「マニュアルを読んだか」については、はい127名 (90.7%)、いいえ13名 (9.3%) であった (図13)。
「マニュアルに沿って実践できているか」については、確実にしている7名 (5.5%)、大体している104名 (81.9%)、時々している15名 (11.9%)、無回答1名であった (図14)。

考 察

点滴静脈注射時の患者確認方法の中で、従来の「名前を呼ぶ」が一番多く、次が「ベッドネーム」での確認である。6年前から当院で導入し、マニュアルにも入っている「リストバンド」の活用率は低い。現時点で一番確実と考えられる方法であるが確認のツールと

して定着していないのが現状である。これらの方法を組み合わせたり単独であっても確実に患者と確認できる方法を選んでいるのが105名 (75%) である。しかし「名前を呼ぶだけ」が15名 (10.7%) である。これは高齢者、聴力障害、認知症等を伴うと誤って返事をすることもあり、不確実な方法である。またいずれの方法も「確実にしていない」と答えているのが13名 (9.3%) いることは患者誤認防止の為にも問題とすべき点である。患者参加による確認方法の一つとして「点滴ラベルをとともに確認する」、「名前を名乗ってもらう」とともに低値である。その原因は看護師が他に確実な方法を取っていると考えていることや、病院内での患者参加の取り組みが進んでおらず、行為がまだまだ根付いていないためと考えられる。患者から見た看護師の確認行動の評価は全体に高く、看護師への信頼感、依存、お任せ医療の意識などの要素が見受けられる。

マニュアルは全看護師の127名 (90.7%) は読んでいるが、マニュアルに沿った実践が7名 (5.5%) しかできていない。大部分は「大体」とか、「時々している」という曖昧な実践結果である。これは看護行為の統一が乱れ医療事故につながっていると考えられる。再度看護師全体でのマニュアルの周知徹底が必要である。

今回のアンケートから、昨今の医療事故などからくる医療不信の中で患者は看護師と共に確認する必要性を求めており、患者の視点から事態がどのように見えているかが理解できた。ポーラ・S・スウェイン氏とスパス氏は「医療システムのチェックとバランス機能に患者に参加してもらうことは、本来ならば単純なミ

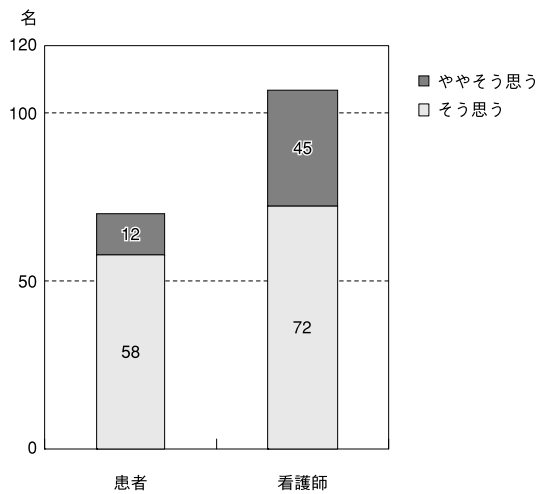


図12 患者と共に点滴ラベルの日付の確認をする必要性

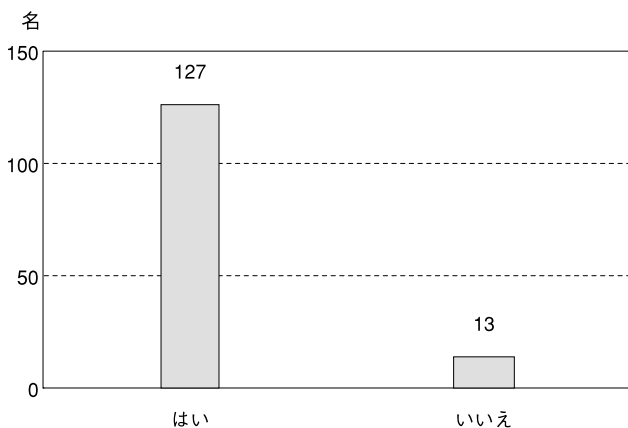


図13 当院の点滴静脈注射マニュアルを読みましたか

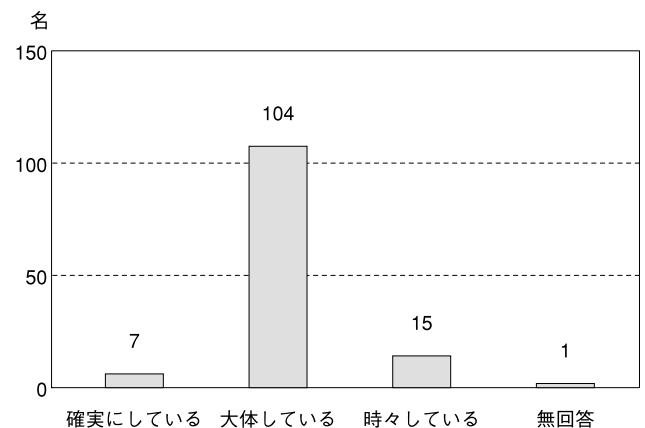


図14 点滴静脈注射マニュアルにそって実践できていますか

スで済んだかもしれない失敗が、患者の体に触れて被害甚大な医療過誤になるのを未然に防ぐことに役立つと考えられる。」¹⁾と云っている。米国では医療ミス低減運動についての取り組みが多くみられ、わが国にも徐々に導入されつつある。その方策として考えられることは、安全を確保するためのツールとしての院内ビデオでの患者参加による安全確認の紹介、点滴時の患者と共に行うチェックリストなどを具体的に導入して働きかけをしていくことである。

結 論

1. 看護師の点滴時の患者確認は従来の方法である「名前を呼ぶ」「ベッドネーム」によるものが主流であ

る。

最も活用すべきリストバンドの活用率は低い。

2. 患者参加による確認方法はまだ根付いていないが、患者、看護師共にその必要性は感じている。

文 献

- 1) 和田ちひろ：医療者と患者の安全パートナーシップ。医療安全 1：80-82, 2004.
- 2) 鮎澤純子, 山内桂子：患者参加の事故防止, 看護 56：76-79. 2004.
- 3) 吉田貴子, 北館則子, 川口陽子, 他：患者が事故防止対策に参画することの効果。日本看護学会論文集（看護管理） 33：65-66. 2003.

Participation of Patients in Prevention of Adverse Patient Incidents : A Survey of Clinical Approaches to Prevent Errors in Drip Infusion

Katsuko FUKUI, Misao KOKO, Hitomi MIKI, Mihoko UEHARA

Nursing Division, Tokushima Red Cross Hospital

Until now, many measures to ensure the safety of medical care have relied excessively on efforts made by medical care providers. Recently, the importance of patient involvement in ensuring the safety of medical care has been pointed out. As the first step in encouraging the participation of patients in the prevention of adverse patient incidents, we conducted a questionnaire survey on the awareness of patients and nurses regarding the prevention of accidents related to drip infusion and current practices in the checking of the safety of drip infusions. The survey yielded the following findings.

1. In descending order of frequency, nurses used the following methods to identify a given patient: 1) calling the patient's name and 2) checking the name label on the bed. Checking the wrist-band, which would seem to be the most reliable means of patient identification, was not practiced frequently.
2. Patients appraised the patient identification action taken by nurses highly.
3. Nurses gave a low appraisal of current practices in patient identification made by nurses and patients. However, both nurses and patients were keenly aware of the necessity of patient identification.

The results from this study will help us establish a patient identification system involving the participation of patients.

Key words: participation of patients, checking of the safety, prevention of accidents

Tokushima Red Cross Hospital Medical Journal 11: 121-125, 2006
